学びの意味や楽しさを「実感」する授業づくりで自信や意欲を育む

埼玉県 さいたま市立高砂小学校

これまでの研究から概ね基礎的・基本的な学習内容の定着は図られてきたさいたま市立高砂小学校は、2012年度から、「分かった・できた」「使えた」などの達成感を持たせ、子ども自身が学びの良さや有用性に気付き、自己の学びを実感する授業づくりに取り組んでいる。研究の進展に伴い、自信や意欲の向上、また学び合いの深まりといった変化が表れてきた。

取り組みのねらい

- 子どもが学習の成果から達成感や自信を持ち、学んだことを実感しながら現在および未来の自己の生き方につなげていく
- 授業を通して自信を深める場面を増やし、自己肯定感を高める

取り組みの内容

- 子どもを見取る視点を明確にし、子どもが学びを実感している姿の具体化を図る
- 「教師の働きかけの工夫」「学び合う活動の充実」「学びを自覚化させる工夫」という３つの方向性から授業改善を進める
- 授業づくりの基本として９つの重点項目を共有する

取り組みの成果

- 主体的に学習に取り組む姿や学んだことと生活とのつながりを意識する姿が多く見られた
- 共に学び合う活動を通して、互いにかかわり合い、共感しながら、学びを実感する姿が見られた

◉取り組みのねらい

教師の目線ではなく子どもが意義を感じる授業を

さいたま市立高砂小学校は、2012年度に創立142年を迎えた伝統校だ。5世代にわたって通ってきた家庭もあり、地域住民の学校に対する愛着は強い。また、文教都市といわれるさいたま市の中心部に位置することもあり、教育熱心な保護者が多く、全体的に子どもの学力は高いと、小山勝校長は話す。

「生活習慣が定着し、学習に意欲的な子どもが多くいます。その中にも多様な個性を持つ子どもがいるのは、公立小学校の良さです。

School Data

◎1871（明治4年）開校。毎年、全教科で自主的な公開研究協議会に取り組む。2012年度からの研究テーマは、「子どもの学びを基軸にした教育課程の創造～子どもが学びを実感できる授業づくり～」。

校長	小山 勝先生
児童数	822人　　学級数 24学級
所在地	〒330-0064　埼玉県さいたま市浦和区岸町4-1-29
TEL	048-829-2737
URL	http://takasago-e.saitama-city.ed.jp/
公開研究協議会	2014年2月7日（金）予定

授業で高める自己肯定感

一人ひとりの可能性を伸ばすために、本校では以前から自主研究に取り組んできました」

毎年実施する「公開研究協議会」は、12年度に41回を迎えた。校内研修も頻繁に行うため、子どもは授業中でも人から見られることに動じず、「自分の力を見てもらいたい」という気持ちがある。

これまでの研究は、その時々の子どもの実態に応じ、主に学習指導法をテーマとしてきた。その中で近年見えてきた課題が、子どもが学ぶ意義をあまり実感していないのではないかということだった。研究主任の中條真紀先生は次のように説明する。

「確かな学力を身に付け、生き生きと学ぶ子どもを育成していくためには、子どもが自己の成長や変容に気付き、豊かな学びを通して、学ぶことの有用性や自己の変容を実感できる授業づくりが重要だと考えます。そこで12年度から、教師の目線からではなく、子ども自身が『分かった・できた』『使えた』『変わった』といった実感を持てる授業を目指して研究を進めています」

◉取り組みの内容・成果

3つの方向性を共有し授業改善に取り組む

まず、子どもが「学びを実感している姿」の共通理解を図った。これは、教師全員が同じ授業を見て、発問や子どもの反応を書き出し、その中で「学びを実感している」と思った場面にシールを貼るなどして、検討を重ね、授業の見取りの視点とした（図1）。その上で、目指す授業づくりの方向性を、教師、学習材、学習活動から具体化した（図2）。

①教師の働きかけの工夫―疑問や期待を抱く教材など、情意面から子どもに働き掛ける。

②学び合う活動の充実―協同して学ぶ活動を充実し、学習の理解や思考を深める。自分

図1　子どもが学びを実感している姿の見取りの視点

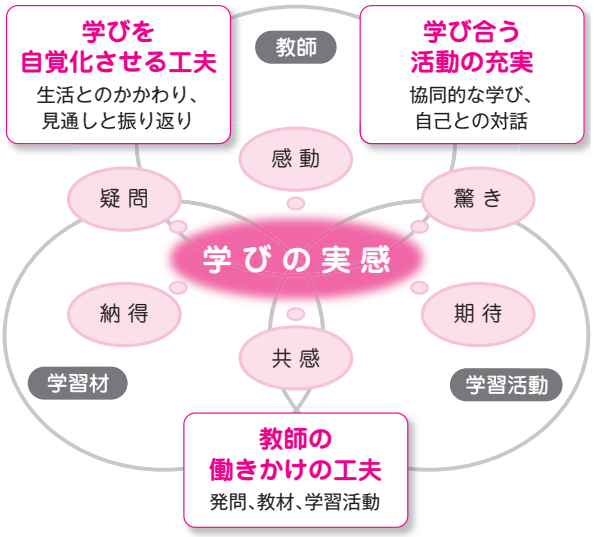
〈分かる・できる〉を自覚している（基礎・基本の習得）
「分からないことが分かった」「出来なかったことが出来た」

〈使える〉を自覚している（知識・技能の活用）
「学んだことを使える」「学んだことが役立った」

〈変わる〉を自覚している（自己の成長・変容）
「よりよい自分へ変わることが出来た」
「出来る自分をもっと感じたい」

＊同校の資料を基に編集部で作成

図2　授業づくりの3つの方向性



＊同校の資料を基に編集部で作成

さいたま市立高砂小学校校長
小山 勝 こやま・まさる
「子どもが夢に向かう力を育むために、学習の理解の徹底、心身のバランスの良い発達を支えたい」

さいたま市立高砂小学校
中條真紀 ちゅうじょう・まさき
研究主任。4学年担任。「子どもは無限の可能性を秘めている。その可能性が開花するきっかけを与えたい」

さいたま市立高砂小学校
小林 隆 こばやし・たかし
生徒指導主任。研究副主任。「子どもも教師も『明日が楽しみな毎日』を過ごせる学校をつくりたい」

さいたま市立高砂小学校
品田大介 しなだ・だいすけ
研究副主任。6学年担任。「子どもと共に学び続けたい。子どもにとって『太陽』のような教師でありたい」

さいたま市立高砂小学校
鈴木友理 すずき・ゆり
5学年担任。国語パート長。「一人ひとりの子どもに目を向け、子どもも私も楽しさを感じる学級をつくりたい」

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

や他者の考えを理解し合えるようにする。

③学びを自覚化させる工夫―生活での経験や他教科と関連させながら、課題解決の見通しや学習活動の振り返りを充実させる。

更に、授業づくりの基本として「9の重点」も共有した（**図3**）。

「『9の重点』は本校のスタンダードであり、教師全員がファイルに入れて常に持ち歩いています。若手教師が増える中で、授業の基本を継承する意味もあります」（小山校長）

では、授業実践について見ていこう。

●国語―出来た物語にクラスで賞を贈る

5学年担任で国語パート長の鈴木友理先生は、子どもの自己肯定感の低さを授業中に感じることがあったと話す。

「よい作品が出来上がっても『自分にはこんなものしか出来ない』と言う子どもがいました。それは、本当に出来ていないと思っているのではなく、褒めてほしいことの裏返しでもあるのでしょう。一人ひとりに対しても、出来たことはよく出来たと褒め、出来ないことに手を差し伸べるように心掛けています」

教師からの働き掛けとしては、単元の導入時に見本となる例を提示するようにしている。「どういうものをつくるのか」「どんな姿を目指してスピーチをするか」といったイメージを明確にするのがねらいだ。

授業では学び合いも頻繁に行う。5年生の物語を書く単元では、途中で「編集会議」としてグループ活動を行い、友だちの物語を読んでアドバイスし合った。最後には作品を発表し、良かった点を見付けて賞を贈り合った。子どもは「表現が工夫されているで賞」「話し言葉がいっぱいあったで賞」など、多彩な賞を考えたという。こうした活動によって、作品が価値付けられ、自分の学びの深まりを実感し、自信を深める子どもの姿が見られた。

「話し合い活動を充実させたことで、自分の作品だけではなく、友だちの作品も『もっと良くするには』という観点で話し合えました。普段、特別に仲が良くなくても意見を出し合ったり、自然と拍手を送ったりするようになったのも良い変化です」（鈴木先生）

●社会―歴史を通して、自分の未来を考える

社会では生活とのつながりを実感させるため、教材として身近に感じられるテーマを扱ったり、人物を登場させたりしている。例えば、6年生の外国文化を学ぶ単元では、最初にいろいろな国の食事の写真を見せ、子どもにとって身近な食文化について比較させた。韓国文化を学ぶ授業では、韓国人のゲストティーチャーを招いた。

授業では、「これを調べよう」と教師が指示するのではなく、子どもが調べたくなるような課題の提示を心掛けていると、6学年担

図3　授業づくり「9の重点」

重点1　目標を明確に、子どもの姿は具体的に設定する
目標を明確にして子どもが「分かる」授業をつくる。目指す子どもの姿を具体的に設定すると目標への道筋が見えてくる

重点2　習得する学びと活用する学びを両立させ、子どもの変容を目指す
基礎・基本の定着と共に、習得と活用を両立させる学習の充実を図る

重点3　子どもの思考力・判断力・表現力が育つ授業構成を工夫する
子どもの思考を引き出す、判断をうながす、子どもが表現したくなる仕組みをつくる

重点4　発問、課題を十分に吟味する
学習の方向を決める発問、また活動内容を十分に吟味する

重点5　板書・掲示・空間づくりを工夫する
子どもが学習成果を振り返れる板書や掲示を心掛ける。教室の雰囲気も大切にする

重点6　子どもの反応を想定する
子どものつぶやきや表情の変化、また授業の要所を想定しておく

重点7　教師の言葉掛けを想定する
導入・展開・終末という流れの中で、子どもの学習を深める言葉掛けを想定する

重点8　学び合いを取り入れる
「話し合う・見合う・協力する」など協同して学ぶ学習を取り入れる

重点9　教材・教具を十分に吟味する
十分に吟味した上で、子どもの五感や感性に響く出会わせ方をする

＊同校の資料を基に編集部で作成

授業で高める自己肯定感

任の品田大介先生は話す。

「最初に子どもが知らないものを見せて興味を引き付け、『調べたい』という意欲を起こさせます。自分からやりたいと思って取り組み、理解できたことが自信につながります」

単に知識を増やすのではなく、社会という教科を通して「自分」や「未来」を考えさせることも大切にしている。

「江戸時代の文化を学ぶ単元では、江戸時代から現代まで伝わる文化がこの先どうなるのかを考えさせました。そこまで長く続く文化を途絶えさせてはいけない、大切にしたいと思うようになり、自分には何が出来るのかと考えが深まります。こうした学習が、これからの自分を考え、自分を認めることにつながると考えています」（品田先生）

●図工―適切な作品例を見せ意欲を高める

図工では、単元の最初に作品をつくる意欲を高めることを大切にしていると、研究副主任の小林隆先生は話す。

「子どもが『自分もこんな作品をつくりたい』と思うようなモデルを見せ、感動の扉を開きます。ただ、あまりレベルが高いと『自分には無理』と思ってしまうので、『少し頑張れば出来そう』というレベルにしています」

小林先生は、子どもの自己肯定感を高めるには授業が楽しいことが最も重要だと話す。

「テーマについてみんなで話し合い、教え合いながら進めて楽しければ、子どもは前向きな気持ちで取り組みます」

制作を通して自分を見つめ直すことが出来るようなテーマも設定している。6年生の最後の単元では、自分の人形をつくった。

「自分に似た人形をつくるためには、自分を見つめ直すことが必要です。その過程を通して、自分を大切にする気持ちを深めてもらいたいと思っています。過去、現在、未来のいずれの自分でもよいことにして幅を持たせています」（小林先生）

◉今後の展望

学び合い活動の工夫により学習に向かうサイクルを確立

今後も授業づくりの3つの方向性を踏まえて授業改善を進めていくが、中でも、学び合い活動には重点を置きたいとしている。

「教師から褒められるのもよいのですが、友だちから認められることはまた格別で、自己肯定感を向上させるには不可欠です。認め合いによって自信が深まると、意欲が湧いて次のステップに進みたくなるというサイクルが生まれます」（小山校長）

単なる話し合いを超え、いかに学び合い認め合える活動にするかが今後の重点テーマだ。

「子どもが学びを実感するために、各教科における学び合いの場面で、どのような働き掛けが効果的なのか、子どもの姿を基に検証していきます」（中條先生）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教師集団は、常に目指す子ども像を意識し、一人ひとりの資質や経験を発揮しながら集団として同じベクトルを持たなくてはなりません。私も研究同人の1人であり、集団の後押しをするのは、校長の役割と感じています。また教師だけではなく、職員も一致団結して子どもを育てる学校づくりに努めています。

子どもと同じく、教師も認められるとうれしいものです。互いが認め合える集団にしていきたいと思います。

校長　**小山 勝**先生

ミドルリーダーの役割

「子どもが学びを実感できる授業づくり」という研究テーマと同様に、教師としての学びを実感できる研究にしたいと考えています。研究の見通しを提示すること、その上で組織の力を生かし運営すること、取り組みの成果と課題をしっかり見つめ理論と実践をつなげることを大切に、研究を進めています。近年は若手教師が増えていますが、本校の経営方針「共働共励」を心掛け、共に学び合う仲間として、力を合わせて取り組んでいきます。

研究主任　**中條真紀**先生